

美術の窓(162)

美術館の入館料・観覧料

大和文華館館長 浅野秀剛

私は、7月下旬から8月上旬にかけてアメリカに出張したが、そこで、しばしば美術館の入館料が話題になった。コロナ禍でアメリカの美術館の入館料が高騰し、25ドルから30ドルになったというのである。

今回訪ねたのは、ボストン美術館、イザベラ・スチュワート・ガードナー美術館(ボストン)とフィラデルフィア美術館であるが、大人の料金が、それぞれ27ドル、20ドル、25ドルであった。今回は行かなかったが、ニューヨークのメトロポリタン美術館は30ドルになったという。30ドルは、今の円安水準である1ドル=140円で計算すると、4200円にもなる。ドイツニerlandのような大型遊園施設に比べると高くないという考え方もあるが、近年、大幅に上がったことは確かである。

日本では、大塚国際美術館(徳島県鳴門市)が3300円、岡田美術館(箱根)が2800円、足立美術館(鳥根県安来市)が2300円といったところが高額組であるが、ブロックバスター展(大都市の美術館での大型特別展)の観覧料も2000円を超えることが珍しくなってきた。コロナ禍で入館者が大幅に落ち込んだから値上げという側面もあるが、これでは美術館は益々遠くなるのではと、憂いているのは私だけではないであろう。

アメリカ出張が契機となり、改めて、美術館の入館料・観覧料について考えてみた。

そうしたら、メトロポリタン美術館は安易に30ドルにしたわけではない(12歳以下は無料、シニア割引、学生割引はある)ということが分かってきた。簡単に言えば、観光客からは、きっちりそれなりのお金

をいただくことにしたのである。だから、ニューヨーク州の在住者と、ニューヨーク州、ニュージャージー州、コネチカット州の学生は任意の金額(払わなくても可)で入館できる。州の住民と近隣の学生を優遇するのは、市から援助を受けていることによる住民優遇と低所得者対策と思われる。住民すべてが作品を鑑賞できる環境は維持したのである。地域外からの訪問者、つまり観光客は低所得者ではないとみなし、相応のお金をいただくことにした。各種の割引制度をすべて廃したのは、それでも来たい人は来るという自信の表れであろう。それに、メンバーシップ制度は充実している。日本の美術館のメンバーシップは、年に2~3回来れば元が取れますよ、というお得感を売りにしているが、アメリカは文字通り美術館の会員であり、美術館の経営を支えるための制度なのである。第一、住民優遇料金設定なのだから、お得感目当てで会員になる必要はない。

日本はどうであろうか。

この度改正された博物館法でも、「公立博物館は、入館料その他博物館資利用に対する対価を徴収してはならない。」という原則はそのままであるが、ほとんどの美術館が観覧料を徴収していることは周知のとおりである(現在、多くの美術館が無料ゾーンを設けているが、全スペースが無料の館はわずか)。ただ、所藏品展の観覧料は低額、特別展の観覧料は高額に設定し、特別展の観覧券があれば所藏品展を無料で見られる館がほとんどである。裏を返せば、特別展は見ないで所藏品展だけを見

る人はわずかしかないという現状がある。

ところが、2年前の5月にリニューアルオープンした京都市京セラ美術館はかなり異なる運用をしている。本館の北回廊1階、北回廊2階、南回廊1階、南回廊2階と、新館東山キューブの5区画をそれぞれ別の企画で回し、個別に観覧料を取る設定にした。原則として南回廊1階を所藏品展スペースに当て、新館東山キューブは特別展スペース、他の区画は主催・共催の特別展あるいは貸スペースとした(私の認識であり美術館に確認していないことをお断りしておきたい)。そして、「コレクションルーム」と銘打つ所藏品展の観覧料を特別展から独立させ、特別展を見た人も有料としたのである(ただし100円割引としている)。さらに、京都市外在住者を京都市内在住者より高く設定した。現在の一般(大人)の料金は、市外在住者730円、市内在住者520円である。

一年前の夏、私はそれを知らずに、特別展を見た後コレクションルームに行き、市外在住者は高いということを知りて腹を立て、見ずに帰った。その時は、奈良から来たのに何故市内の人(近い人)より高いのか、と思ったのである。今は浅慮だったと反省している。市内在住者優遇(低所得者への配慮?)は理に適っている。観光客から嫌われるかどうかは措くとして、それなりのお金を持っている観光客を優遇する必要はないのだ(ただ、市外在住でも小中学生は無料にしてもよいと思う)。

今年の2月にオープンした大阪中之島美術館も少し珍しい観覧料の設定をしている。現在(2022年9月1日)開催中の特別展「展覧会 岡本太郎」は一般(大人)1800円、開館記念展と銘打つ「みんなのまち 大阪の肖像」は一般(大

人)1200円で、相互割引はある(300円割引)ものの別料金となっている。「みんなのまち 大阪の肖像」は、所藏品を中心とした特別展という位置づけである。今後もこのような運用を続けるか注視していきたいが、それぞれの館がそれぞれの判断で試行するのはいいことと思う。

美術館の入館料・観覧料で、住民優遇、低所得者対策、所藏品展の扱いとともに重要なのは、シニア(高齢者)割引、学生割引、障がい者割引であろう。その中で、美術館関係者の間で時々話題になるのは、シニア割引である。何故、シニアを割引かなければならないのかということである。それは少なくとも二つの観点から考える必要があるだろう。第一は、シニアは年金受給者が多くかつ無職の人が多いため、相対的に貧しいという考え方や、もう一つは、人口の多いシニアを積極的に誘因するために割引くという考え方である。現役世代より裕福なシニアは少なくないと思うが、懐具合が豊かでないシニアが美術館に行った時、少し安くなっていけばありがたいと思うのは人情であろう。

それでは、美術館の入館料・観覧料は、安ければ安いほどいいのか、無料が理想なのかというと、必ずしもそうではない。無料にしたとき、その開催経費を誰が負担するのか、無料だと内容もたいしたことはないと思って入らない人をどう考えるか、という問題が残るからである。

それにしても、私の好きなイギリスの国立博物館・美術館の入館料はすべて無料なのだ。私は、それを維持している国民はすばらしいと思っている。

季刊 美のたより No.220

令和4年9月30日

発行 大和文華館